■『蒙古襲来絵詞模本（松浦本）』（松浦史料博物館蔵）

【蒙古襲来絵詞】

『蒙古襲来絵詞』は鎌倉時代後期の戦記絵巻。肥後国御家人竹崎季長（たけざきすえなが）が、『元寇』における自分の戦いを描かせたもので、文永・弘安の役の様子が絵と詞書によって克明に記録されています。集団戦術で戦う蒙古兵の姿や、軍船、使用した「てつはう」などの兵器が描かれた唯一の画像史料として知られています。

特集

国指定史跡 鷹島神崎遺跡（たかしまこうざきいせき）

蒙古襲来から730年…当時の出来事を今に伝える貴重な遺物が、鷹島海底遺跡から多数出土しています。そして今年3月、国はこの遺跡の中でも特に重要とされる区域を国指定史跡としました。その史跡の名は「鷹島神崎遺跡」。我が国の水中考古学の発展に大きな期待が寄せられています。

国内初の海底遺跡

鷹島神崎遺跡は、鷹島の南岸東部に位置する神崎港地先の海域に所在する蒙古襲来に関わる古戦場です。

この海域は、弘安の役（西暦1281年）の際に、元軍の船団が暴風雨により沈没した地点として伝えられ、鷹島の南岸では以前から壺類や刀剣、碇石などが地元の漁師などによって水中から引き揚げられていました。

昭和55年から始められた発掘調査では、船体の一部や陶磁器類、漆製品や矢束、刀剣、冑（かぶと）などの武器や武具類などが多量に出土し、これらの出土品を分析した結果、弘安の役で沈没した元軍のものである可能性が高まりました。

蒙古襲来は、鎌倉幕府を崩壊に導いた原因の一つであり、日本史上においても重要な事件として知られています。この遺跡から出土するたくさんの遺物は、これまで文献や絵画などでしか知ることができなかった蒙古襲来の様相を具体的に明らかにしていく貴重な資料といえます。

このようなことから、本遺跡は、当時の軍事や外交などを理解する上で極めて重要な遺跡として評価され、平成24年3月27日に、国内の海底遺跡では初の国指定史跡となりました。

▲ 鷹島神崎遺跡の位置

蒙古襲来

13世紀、アジアには、元と呼ばれるヨーロッパにまで広がる大帝国が生まれました。この元の最初の皇帝になったフビライにとって、大陸の東方海上に浮かぶ日本は、金・銀・真珠の国として魅力的な国でした。フビライは日本を従える目的で、何度か使者を送ってきましたが、鎌倉幕府の執権北条時宗は、使者をことごとく追い返し、元軍の襲来に備えて、九州の御家人たちに、海岸沿いの要地を守るように命じました。

文永11年（1274年）10月、元は軍船9百隻、2万5千人の兵で対馬の佐須浦小茂田浜の沖合に現れました。これが蒙古襲来（元寇）の始まりです。

元軍は対馬・壱岐を襲い、続いて平戸・鷹島が襲われました。この地方には松浦党の武士たちが勢力をはっていましたが、元軍の勢いを止めることはできませんでした。松浦地方の島々を荒し回った元軍は博多へ上陸し、博多では海岸を守っていた武士たちとの間で激しい戦いとなりました。元軍は太鼓を叩き、ドラを打ち鳴らして、ときの声を上げて戦う集団戦法で、鉄鏃に毒を塗った矢や火薬を用いて、空中で激しい音と火花を散らす「てつはう」という新兵器を使用するなど、幕府軍は経験したことのない武器や戦法に苦戦を強いられ、一時大宰府まで退きました。博多を制圧した元軍は幕府軍を追撃することはせず翌日には撤退したとされています。これを「文永の役」と呼んでいます。

この後、幕府は次の元軍の襲来に備えて、九州各地の武士に博多湾沿岸約20キロに高さ約3メートルの石築地（防塁）を築かせ、さらに武士を交替で警備にあたらせました。

1279年に南宋を滅ぼして中国を統一した元は、弘安4年（1281年）軍船4千4百隻、兵士14万人の大軍で再び日本に攻めてきました。元軍は、日本での長期滞在に備えて、武器や住宅用の資材、農具までも持ってきました。北からの元軍（東路軍）は対馬・壱岐を襲い、博多も襲いました。幕府軍が築いた石築地によって、元軍は博多への上陸を阻まれ、いったん壱岐へ引き返しました。その後、元軍は西からの元軍（江南軍）と合流しようと平戸に移動したため、平戸周辺の海は元の軍船でいっぱいになりました。平戸周辺で西からの軍船と合流した元軍は、体制を立て直して大宰府を攻め落とそうと、博多を目指して東進を開始しました。ところが鷹島沖に集結中の元軍に7月30日夜半から強くなった風が、翌閏7月1日にかけて激しい暴風雨となり、この暴風雨によって元の軍船は次々と沈没してしまいました。瞬く間に形成は逆転し、残敵を撃ち払う幕府軍の追撃戦が始まりました。この残敵掃討戦を詳しく伝えているものが竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』になります。

元軍は大損害を受け、辛うじて生き残った元軍の兵士は逃げて帰りました。これを「弘安の役」と呼んでいます。

当時の鎌倉時代においては、「元寇」という用語は使用されておらず、「蒙古合戦」「文永十一年蒙古合戦」「弘安四年蒙古合戦」「蒙古人合戦」などと称されています。

鷹島海底遺跡の調査経緯

昭和55年に鷹島において、文部省の科学研究費特定研究の一部として「水中考古学に関する基礎的研究」が実施されました。3年間にわたる調査の結果、鷹島南岸一帯の海底に蒙古襲来にかかる遺物が多数残存する可能性が高いと判断され、長崎県教育委員会はこの一帯を「鷹島海底遺跡」として遺跡台帳に登録しました。

平成4年から平成11年まで、鷹島海底遺跡の浅海域（せんかいいき）の特徴を解明するために、潜水し目視での遺物分布状況の調査が実施されました。

この調査により、海底の状況によって遺物の分布状況や埋没状況が異なることが分かりました。

また、平成6年には、水深20～21メートルの海底で大型の木製碇（いかり）が原位置を保って検出されました。これまで不明であった元の軍船に使用された碇（いかり）の全体構造が把握できる極めて画期的な発見となり、特に神崎港周辺が蒙古襲来関係遺物の発見には重要な地点であることも分かりました。

この調査結果を踏まえ、平成12年度から平成17年度まで、国・県の補助を受け、海底に調査区を設定して確認調査が実施され、武器や武具類、船舶関連遺物、青磁碗、青銅製品などさまざまな遺物が出土しています。特に平成13年度の調査では、「てつはう」の実物が発見され、絵巻物や文献から想像するしかなかった元軍の最新兵器の一端が明らかになりました。さらに、平成17年度には「鷹島海底遺跡内容確認探査」により、鷹島南岸の詳細な地形図の作成と海底下の地層の状況も調査されました。

平成18年度からは、調査区域が伊万里湾に広げられ、元の軍船がどこに沈んで埋もれているか、その解明に向けての調査が本格的に始められました。

平成23年度には、調査を行う琉球大学の池田榮史（よしふみ）教授の研究チームが、元の軍船の構造が分かる遺物（竜骨と外板が残る船底）を発見。世界史的にも重要な発見となりました。現在も引き続き、池田教授の研究チームによる元寇沈船の調査が行われています。

今回指定された鷹島神崎遺跡は、鷹島海底遺跡のうち神崎港周辺の約1.5キロ、海岸から約200メートルが指定されています。

▲ 海底調査の様子